

2025年度（2024年度実施） 慶應義塾大学大学院 医学研究科修士課程入学試験（第1期）  
出題の意図

（出題の背景）

日本では1949年に湯川秀樹がノーベル物理学賞を受賞して以来、自然科学領域では25人のノーベル賞受賞者を輩出してきた。しかし近年ではtranslational researchに代表されるように直近のインパクトの大きい実用的な研究成果が増え、後世に広く利用されるような概念・理論を構成するような研究が減少したと言われている。本設問では、これを客観的に示したと考えられる Nature 2023;623:14-6 の中にあった図を問題の一部として利用し、その原因と対策について問うことで、受験者のこの課題に関する知識と考えを聞きながら、研究者としての今後のあり方を確認した。研究者としてのキャリアを続けるためには論文業績が求められることから効率的に成果を報告する必要があるが、一方で継続的に論文業績を出すためには長期的な視点に立った研究に対する姿勢が重要になると出題者は考えている。

（解答に含まれるべき内容例）

基礎研究、応用研究、トランスレーショナルリサーチ、ブレークスルー研究、短期的研究成果、長期的研究視点、研究資金配分、科学技術政策、研究評価システム、キャリア形成、

2025年度（2024年度実施） 慶應義塾大学大学院 医学研究科修士課程入学試験（第2期）  
出題の意図

（出題の背景）

研究不正は、学術研究の信頼性を根底から損なう重大な問題であり、代表的なものとして捏造、改ざん、盗用が挙げられる。さらに、二重投稿やゴーストオーサー、ギフトオーサーに代表される不適切オーサーシップも、研究成果の公正な評価を歪める行為として問題視されている。これから研究を始める立場としてこれらを正確に理解しているか確認するとともに、どのような姿勢で研究に臨むかを問う問題である。

こうした研究不正をなくすためには、研究倫理に基づいた適切な研究体制の整備が不可欠である。施設で実施されている研究倫理教育や研究に関わる利益相反に関するプログラムに参加するとともに、研究データの適切なデータ管理と研究成果の再現性の確保に努め、正しい倫理観に基づいて研究を実践する姿勢を示してもらいたい。

（解答に含まれるべき内容例）

捏造、改ざん、盗用、二重投稿、ゴーストオーサー、ギフトオーサー、研究体制、研究倫理、倫理教育、利益相反、データ管理、再現性、内部告発